

シオン通信

大宮シオン・ルーテル教会

2012 年 1 1 月 第 36 号

日本ルーテル教団

大宮シオン・ルーテル教会

〒331-0814

さいたま市北区東大成町 1-229

phone/fax : 048-663-0215

URL <http://omiya.church.jp>

Email : heeme6343@gmail.com

梁 熙 梅(やん・ひめ)

すべてをかける

息子の学校は学食ですが、時々、学校のスケジュールによってお弁当を作るときがあります。ある日、買い物に行く暇のない時で、冷蔵庫にあるもので詰めてお弁当をつくりました。それでも、蓋を開けたときにがっかりしないように、おかずの色併せや彼の好き嫌いなものを気にしながら作りました。午後、学校から帰ってきた息子は、「ご馳走様！」と言って空っぽのお弁当を渡しなが、ご飯にかけた鮭フレークが足りなかったと言うのです。その鮭フレークは、数日前に来ていた北海道の祖父ちゃん祖母ちゃんが使って残したものでした。「ピンに残っていたものを全部欠けたよ」と言ったら、息子は、「あ、そうか、あるものすべてをかけたのね、あの聖書の女の人のように！」と、素晴らしい返事を返してくれました。一瞬、この子は誰の子だ？どうしてこんなに素晴らしい会話ができるの？と、ギュッと抱きしめてあげたいほど嬉しくなりました。私の、中学校3年生の受験生とのこの頃の暮らしの状況です。

本当にご無沙汰しまして申し訳ない思いで、今、紙面を埋めています。それから冬を送り、春が来て、夏が過ぎ、秋を迎えています。気温が段々と下がり、季節はまた冬へ向かおうとしています。みなさま、いかがお過ごしでしょうか。きっと、神さまの恵みの中で豊かな時間を過ごしておられることと信じます。

大宮教会の近況ですが、笠原光見神学生(神学校2年)が4月より実習に来ています。来年(2013 年)の7月に宣教研修に行くまでの期間、当教会で研修をします。どうぞ、実りのある研修ができますように、皆さまのお祈りに覚えていただければ幸いです。

肥後美子姉が、9 月にフランスのテゼに行き、本番のテゼに接して帰ってきました。みんなと本番の雰囲気分かち合おうと、11 月 11 日の主日礼拝をテゼの祈りでもって導いてくださいます。なお、来年の 1 月より毎月第三水曜日午後 7 時より、テゼの祈りでもって礼拝をささげることになりました。どうぞ、近くまでいらっしゃったときには気軽に立ち寄ってみてください。フランスでの体験談が 8 ページに載っています。

三浦和代姉(旧姓 田口)が、10 月 4 日に元気でとてもかわいい女の子を出産しました。名前は三浦詩織。神さまの愛に包まれて健やかに育ちますようにお祈りしています。

10 月に、ミカ・ルオホネン姉がフィンランドから二児を連れて里帰り中です。数ヶ月の間、二人とも大きくなり、どうやら私の顔が忘れられているようです^^；

聖書 マルコによる福音書10章17節～31節

17 イエスが旅に出ようとされると、ある人が走り寄って、ひざまずいて尋ねた。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」18 イエスは言われた。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもない。」19 『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」20 すると彼は、「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言った。21 イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」22 その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。23 イエスは弟子たちを見回して言われた。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。」24 弟子たちはこの言葉を聞いて驚いた。イエスは更に言葉を続けられた。「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。25 金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」26 弟子たちはますます驚いて、「それでは、だれが救われるのだろうか」と互いに言った。27 イエスは彼らを見つめて言われた。「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。」28 ペトロがイエスに、「このとおり、わたしたちは何もかも捨ててあなたに従って参りました」と言いだした。29 イエスは言われた。「はっきり言うておく。わたしのためまた福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子供、畑を捨てた者はだれでも、30 今この世で、迫害も受けるが、家、兄弟、姉妹、母、子供、畑も百倍受け、後の世では永遠の命を受ける。31 しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる。」

人生に大切な一つ

本日、イエスさまを訪ねてきた一人の人、彼はユダヤ人で、小さいときから定められている律法のすべてを守ってきた敬虔な宗教家でありました。さらに、たくさんの財産を持っている金持ちであります。イエスを訪れて、彼は、まずイエスの前に跪きます。金持ちで、小さい頃から定められている律法のすべて

を守ってきたということは、彼が、イスラエル社会の中で、経済的にも社会的にも、それらしき地位にあったということでしょう。その彼が、イエスの前に跪いている。そのことから、彼の人間性をも伺うことができます。人を尊敬することのできる、優れた人間性を持っている人であることが分かります。つまり、謙虚

な人なのですね。さらには、神との関係の中で求めるものを一所懸命に探し求めようとする熱心な、情熱的な人であることも分かります。完璧な人だと言ってもいいほど、優れた人ですね。

けれど、彼自身としては、イエスの前に跪いて切実に願わなければならないくらい、自分に欠けているところがありました。永遠の命が欲しい。つまり、自分が、確実に、救われているかどうか、確信がないのです。それは、満たされるべきところが満たされていないということもできると思います。その欠けたところを、彼はイエスを通して手に入れようとイエスを訪ねてきたのであります。そしてイエスにこう聞きます。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」(17節)と。

ある人が、このようなことを言っていました。神の前にいる私たちの存在は、何かをするための doing ではなく、ありのままの being であると。私という存在そのものが神の前で認められる、ということでありましょう。このようなことを考えるとき、この金持ちが「永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」と聞く質問そのものには問題がある、ということになります。そしてこの聞き方は、私たちが普段、自然に問いかけている質問でもある。そういう意味では、これから、とても大切な会話がイエスさまと金本との間でなされるという

ことになります。

「永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」つまり、この問いかけは、自分に何か「できる」、または何かを「考えられる」という、何らかの可能性があると認識する人の聞き方ですね。私だってそうです。きっと、皆さんだってそうだと思います。自分に何らかの可能性を見出している人は、このような聞き方をすると思います。そして、その可能性を賭けてみる、獲物を手に入れるためだったら、多少の犠牲も求められるかもしれないけれど、自分にある力で挑戦してみたい。たとえそれが神の領域である永遠の命であるとしても。努力した分だけ与えられるという、とても合理的な聞き方ですね。いかにもこの世的でありますし、貪欲の中にたっぴりと浸っている人の姿であります。

あるお坊さんの話ですが、こういうことを言っていました。

「人々はだれも、心を空っぽにして貪欲を捨てると、数え切れないほどいうが、いざ、自分の心の中の、どこを空にし、何を捨てなければならないのか知ることなく、むしろ、より満たそうとしているのではないか。」と。この話しのテーマは「降ろしなさい」で、その中で述べていた言葉です。

そうなのですね。降ろすことなのですね。何かをする、何かをして加えるので

はなく、むしろ減らすこと。降ろすこと。無くすこと。捨てる作業をすることです。ね。自分の努力によって得て、着実に積み重ねておいたものを、まるで、何の価値もないもののように手放す作業をすること。その作業をしない限り、人は、無条件に、一方的に与えられる神の恵みを、価値のある尊いものとして受け入れることはできないのです。与えられていても、それが入る場所もないのであります。

「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいのでしょうか。」と聞く金持ちの質問に、イエスさまはこのように答えられました。

「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもない。」(18 節)。

「神おひとりのほかに、善い者はだれもない！」と言うのです。とても大切なお言葉が返されています。どれだけ大切な言葉であるかと申しますと、一人の人の人生が、金持ちの人生がひっくり返されるほど大切な言葉が述べられました。つまり、「持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。」(21 節)と。今まで努力して積み上げてきた功績のすべてを売り払って施すように、無くすように、降ろしてから、それからわたしに従いなさいと勧めるお言葉であります。

貧しい人として施しの相手にされている人たちは、当時のユダヤの社会の中

では、神の救いから遠いと思われている人々のことであります。その人々のために、何の価値も見出せない人々のために、一所懸命に積み上げてきたものを施しなさいと勧められている。しかも、この財産は、金持ちが永遠の命をゲットすることができるならばそれに賭けようと、充てにしていたもの、自分の欠けたところを満たすために用いようと、大切にしていたものです。金持ちは、それを捨てるように勧められたのであります。

人は、自分が大事にしているものを手放すときがきたとしても、ある程度、その価値をわかってくれる人に譲ろうとします。教会の宣教の視点から考えるときも、献金の送り先が、貧しい人だったら誰でもいいというわけにはいきません。しかし、イエスさまは、ただ、貧しい人々に施しなさい。それだけであります。つまり、その意味は、今、永遠の命を求めるあなたの手元にあるものは、永遠の命とは関係のないもの。むしろ、永遠の命を得るためには邪魔なものであるですよ、それを手放さない限り永遠の命に生きることは難しいことですよ、ということをおっしゃるのであります。

人によって、大切にしているものは異なるでしょう。この金持ちにとっては多くの財産でした。皆さんと私にとって大切なものは、この金持ちとは違うと思います。本日の日課を読み勧めますと、最

後の方でイエスさまはこのように言われます。「わたしのためまた福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子供、畑を捨てた者はだれでも、今この世で、迫害も受けるが、家、兄弟、姉妹、母、子供、畑も百倍受け、後の世では永遠の命を受ける。」(29～30 節)。

つまり、このことは、ある人にとっては家族が大切なものであったり、ある人にとっては新しく購入した家が、または土地が大切なものであったり、または、社会的な地位や名誉が何より大切なもののなのかもしれません。

ルターは、「人間が最後まで手放さないものがその人の神である」といいます。最期の時に、神への信仰一筋で死を向かえることができたかと望みますが、しかし、死ぬその瞬間まで、他に手放したくなく握り締めているものがある。それが、思いを込めて、努力して、歯を食いしばって手に入れたものであればなおさら、手放したくないのです。そしてそれが、私たちの現実ではないでしょうか。ですから、結局はそれが自分の神になっていて、それを通して人は救いを願ったりするわけであります。

「「永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」と、イエスさまの前に跪いて求めていた金持ちは、「行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい」と勧められたイエスさまの言葉に、「気を落とし、悲しみな

がら立ち去った」と言います。金持ちとのやり取りを終えたイエスさまは、弟子たちにこう述べておられます。「金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」(25 節)と。

きっと、弟子たちもイエスさまの側で金持ちとのやり取りを見ていたことでしょう。ですから彼らは驚きを隠さず、ささやくのでありました。なぜなら、え！そうだったら自分たちは？自分たちは救われるのだろうか？と、急に不安になったのでしょうか。「それでは、だれが救われるのだろうか」と互いに言い合う言葉が、彼らの心の状況を良く表しています。

けれどもこのことは、私たちも驚くことではないでしょうか。本当に、それでは、誰が救われるのだろうか？と、自分が習得した知識で神を捕らえ、自分が積み重ねてきた信仰の経歴によって救いを捕らえ、自分が欠けた分だけ祝福に与るという確信のもとで信仰生活を営む私たちであります。また逆に、救いの確信がないときには、自分の中の何かが足りないからなのだと、自分自身の信仰の弱さにがっかりしたりして、自分の中から救われる可能性を見出そうとする、そういう私たちであるのです。

ですから、イエスさまは、「行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい」と勧められる。つまり、あなたの中の可能性をすべて捨てなさい。降

ろしなさい。無くしなさいと勧めておられるのであります。つまりそれは、「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。」(27 節)ということ！

つまり、「誰が救われるだろう？」または、私が救われているかどうか、永遠の命を得たいのか得たくないのか、与えられているのか与えられていないのか、これは、私たち人間側で議論するようなことではない、ということであります。どんなに大金持ちであって力を持っているとしても、どんなに強い権力を持ち天下を手に入れたと誇る人であっても、たとえ、修道を行い、自分を無にするような境地まで達した人であるとしても、それが救われるための条件にはならない、ということです。それらが永遠の命をゲットするための道具にはならない、ということであります。

目に見えるものはどんなものでも、人を束縛させます。目に見えない自由に生きることを妨げて、縄目の役割をするのがこの世にあるものであります。それは、私自身も他者に対して縄目的な存在になり得る、ということです。そこから自由になるためには、あなたと私との間に、物質と私との間に、イエス・キリストがおられなければならない。イエス・キリストがおられるそこが「従いなさい」と勧められたイエスの道だと思います。

金持ちが、全財産を用いてまでも手に入れたがった永遠の命、それは、私たちが、イエス・キリストを通して神との新しい関係に入ること、既に、私たちの中で始まっています。来るべき日には完成されるものであり、そしてこの命は限りなく続くのです。

人が生きる一生涯はそれほど長くありません。人生六十年といえども、六十年を生きてみるとあっという間に過ぎてしまったという思いで第二の人生を迎えるようになり、老いとともに死と向かい合う中で、それこそ救いと永遠の命の近くにいたいという思いで過ごすことでしょう。けれども、その歩みの中にあって、「神お一人のほかに善い方はいない」というこの真理に与ることはとても幸いなことだと思います。つまり、自分がかかっても大切にしてい、大好きなものが、実は、この真理に与るのに妨げになるものであったことを悟る。そこに、死にさえ縛られない真の自由があります。そして、その自由の中に与るとき、私たちには、救われるかどうか、永遠の命を得られたかどうか、それは何の問題にもなりません。なぜなら、私たちの人生は、この善き方に委ねられた祝福された人生であるからです。アーメン。

「これまでの振り返りと、思うこと。」

笠原光見

皆さま大変お世話になっております。大宮シオン・ルーテル教会には4月から教会実習としてお世話になっていますが、早いものでもう10月（この記事が出る時はもう11月でしょうか・・・）で半年が過ぎたことになります。

ここで、今までを少し振り返ってみたいと思います。私を含めて日本ルーテル神学校の二年生は4名いるのですが、毎週の主日礼拝での司式やこれまでに3回の説教奉仕をさせていただいているのは私だけです。もちろん説教準備などいろいろと大変なことがあります、私はこのように礼拝の奉仕に多く関わらせていただいていることで多くの恵みをいただいているのだと思いと同時に感謝しています。

礼拝以外にも様々な行事を通して沢山の喜びと感謝をいただいています。印象に残っている出来事は、埼玉分区の春の親睦会で教会対抗紙飛行機飛ばしは、なかなかの盛り上がりで残念ながら2位でしたがとても楽しかったです。今度は梁先生が先日話されていた誕生日月別対抗、卓球大会は私がいる間に是非開催していただきたいです。そしてもっと教会の皆さんと親睦を深めたいです。6月に行われたチャーチコンサートでは音楽の素晴らしさ、音楽のもつ力を改めて感じ、私にギターを弾くことの賜物を与えてくださった神さまに心から感謝です。このコンサートが地域に根付いたものに大きく成長させてくださいと神さまに願っています。

特別賛美礼拝の時も与えられたことに感謝です。一人ですべての賛美をリードすることは正直大変でした。この先、何人かの賛美奉仕者が与えられもっともっとパワフルな賛美の歌声をもって皆さんのおもいを神さまに届けることができれば素敵だと思います。

ルターハウスに住んでいますので平日の教会行事や土曜日には授業をとっていることで日曜日の礼拝や午後のイベントでしか皆さんと交わりを持つことができないことは残念なことだと思っています。神学生という立場ですからもちろんできることの限界がありますが、その中で皆さんと一緒にいる時間を大切に、神さまから与えられる時と場を誠実に祈りをもって務めていきたいと思い生みます。

もうすぐクリスマスです。当たり前のことですが、今年のクリスマスは一生に一度のこと、この喜びの時を大宮シオン・ルーテル教会で過ごす機会は特別のことだと感じながら皆さんと一緒に喜びの訪れを祝いたいと思っています。よろしくお願い致します。

巡礼とテゼの旅 その1

肥後美子

今年の9月14日から10月3日までの20日間、日本を離れ、遠くフランスの地で過ごした。前半はル・ピュイから始まるサンティエゴ・デ・コンポステーラと呼ばれる巡礼路を歩き、後半はテゼ共同体で黙想と祈りの日々を送った。一方は日々ただ歩き続けるという、さすらい人の生活であり、他方は祈り、歌うという観想生活だった。

両極端と見えるその二つの生活はしかし、同じトーンを持っているのだった。実際、コンポステーラを歩きながら道で出会った巡礼者達とテゼの歌を歌いながら歩き、テゼではコンポステーラを1か月、2か月と歩き続けた人や、これからコンポステーラを歩き始めるに出会った。この世の生活から自分を切り離して、自分の魂と向かい合う、そういう意味で共通しているからなのだろう。

コンポステーラを歩く巡礼者達から、しばしば日本の巡礼路のことを聞かれた。四国八十八か所のお遍路さんのことだ。あるいはマニアックな人がいて熊野巡礼や高野山での修行を経験したというカナダ人にも会った。

お遍路さんも山籠りの業をする山伏も白装束に身を包み死者として旅し浄化されまた地上の生活に戻るといった話を聞いたことがあるが、そうした魂の飢え渴きは国や宗教を超えて等しく人間が共有するものなのだろう。

そうしたスピリチュアルな体験という意味での類似性の他に、コンポステーラでもテゼでも様々な国からやってきた人と時間や空気をまたお互いの文化や信仰を分かちあった。違いを確認した面白く思い、共有し共感できることに喜びを感じた。

巡礼のスタート地 ル・ピュイへ

9月13日の深夜1時に羽田国際空港を飛び立った飛行機はフランクフルトを経由し、リヨンのサンテグジュペリ空港へ。空港から電車を乗り継ぎ午後2時過ぎ、ようやく巡礼路の出発地のル・ピュイ=アン=ヴレに到着。

この歴史的な町は毎年恒例のルネッサンスフェスティバルの最中。せっかくの機会だ、巡礼の前にこの町に2晩滞在することにしていた。重いザックを大聖堂近くの巡礼宿に置き、いざ、中世の空間へ。

街のいたるところに中世の恰好をした人達が歩いている！小学校の生徒と思しき子ども達と教師が中世の衣装を身につけ、楽隊の前に座り、中世の音楽の演奏を聞いていた。そのうち教師が子ども達の手を取り踊りに誘い、音楽に合わせて伝統的なダンスのステップ。大その近くの広場には中世の村の暮らしが再現されている。テントや家畜小屋、機織り機、火に

は鍋がかけられ、テーブルでは中世の恰好をした人達が食事をしている。お祭りの期間、ここで寝泊まりしながら中世の生活をする人たちのグループだ。

子ども達は毎年繰り返されるお祭りを通して、教科書からでは学べない、生きた歴史を学ぶことだろう。このルネッサンスフェア、単に観光の目玉というのではなく、町の歴史や文化を次の世代しっかりと伝えていこうとする心意気のようなものを感じたことだった。

11～12月の教会のイベント

～ 11月礼拝・行事予定 ～

- 11月4日(日) 全聖徒主日
- 11月11日(日) テゼの祈り特別礼拝
シオンカフェ
- 11月18日(日) 成長・収穫感謝合同礼拝
チャーチコンサート

～12月の礼拝・行事予定～

- 12月23日(日) クリスマス特別礼拝 教会学校聖劇
- 12月24日(月) クリスマスイヴ・キャンドルサーヴィス(午後6時)
笠原光見神学生説教



大宮シオン・ルーテル教会

〒 331-0814 さいたま市北区東大成町 1-229

Tel/Fax 048-663-0215

URL : <http://omiya.church.jp>

Email : himei-y@oregano.ocn.ne.jp